理想の保育目指し10年

東陽町ＹＭＣＡ保育園

２００２年６月１日に開園した認証保育所「東陽町ＹＭＣＡ保育園」が10周年を迎えた。当初は園児４人でスタートしたこの園も、今では常時30人以上の０～２歳児を受入れる園になり、これまでに約１８０人の卒園児を送り出してきた。

７月28日（土）、東陽町センターに、在園児や卒園児、保護者など約１２０人が集まり、記念式を行った。第１部の記念礼拝では、板垣弘毅牧師（日本キリスト教団深川教会）からメッセージをいただいた。第２部は、東京ＹＭＣＡの廣田光司総主事のあいさつに続き、開園前からアドバイザーとして尽力くださっている新澤誠治先生から講演をいただいた（＝下枠参照）。講演中は、社会体育・保育専門学校の学生が、別室で子どもたちを預かったほか、母親と離れたがらない乳児のため、会場内にも子どもが遊べるコーナーが設けられた。

第３部の「拡大コーヒー屋さん」では、保育園で用意したカレーライスなどの他、出席者が持ち寄った手作り料理やお菓子でにぎやかな会食を楽しんだ。「コーヒー屋さん」とは、降園後の親子が、園の前のホールでコーヒーとお菓子を囲み、ほっと一息つけるようにと毎月１回開催している園の行事である。卒園後も参加する方が多く、小さなコミュニティーとなっている。今回の10周年記念行事を企画した実行委員会メンバーからも、「コーヒー屋さんの拡大版にしたら誰もが参加しやすいのではないか」との意見が出されたという。

Tシャツデザインコンテストで優勝した小川さん

途中、10年間の保育風景がスライドで映し出されると、小さかった頃の写真の一つ一つに「わあ、○○ちゃんだ！」などと、歓声が沸いた。小学生になった卒園生たちも、「ちっちゃかったねえ」「かわいいね」などといわれ、照れくさそうに笑っていた。

また、10周年を記念して製作するTシャツのデザインを募集したところ、園児、保護者、職員から26点の作品が寄せられ、当日投票により、在園児保護者の小川和伴さんの作品が選ばれた。ＹＭＣＡの「キャラクターディベロップメント」の文字と子どもたちが遊んでいる様子を描いた作品で、近くTシャツとなり販売される。

興津夏子園長からは、「今後も、この保育所をふるさとと思って、いつでも訪れてください」とのメッセージがあり、和やかに閉会した。

（広報室）

石巻通信 vol.3

ＹＭＣＡ石巻支援センター

伊藤剛士

■ＹＭＣＡ歌の広場

昨年から仮設住宅などで実施している「ＹＭＣＡ歌の広場」が、６月25日と７月11日にも開催され、山手センターと南センターの会員が訪問しました。３度目となったグループホーム「あゆかわの郷」の方々は「ＹＭＣＡありがとう」の手作りバナーを作って歓迎してくださいました。

■緑化プロジェクト

６月30日～７月１日、仮設グループホーム「あゆかわの郷」で、花壇作りを行いました。（▼３面に詳細）

■防災頭巾を寄贈

７月４日、石巻市蛇田小学校へ防災頭巾１５０個を贈呈しました。これは、小学校からの依頼を受け、京都ＺＥＲＯワイズメンズクラブが16万円を支援くださり実現しました。頭巾には「ＹＭＣＡ石巻支援センター　京都ＺＥＲＯワイズメンズクラブ」の名前が入っています。

■卒業生がピラティス

７月15日～16日、社会体育・保育専門学校卒業生でインストラクターの野中智恵さんが、仮設住宅でストレッチ・リンパマッサージ・ピラティスなどの指導をボランティアで行いました。家でもできるアドバイスが好評でした。

■学習支援プログラム

７月23～27日、日本基督教団東北教区被災者支援センター・エマオとの協働で小中学生を対象にした「立町いしのまきっこ広場」を行いました。毎日40人ほどの子どもたちが集まり、ボランティアと一緒に宿題をしたほか、アクセサリー作りやボール遊びなど室内外での活動を楽しみました。

■小学校プール指導

７月25～27日、東京ＹＭＣＡ社会体育・保育専門学校生による石巻小学校でのプール指導プログラムを開催。連日１００人を超す子どもたちが、学生から水泳指導を受けたり、一緒に遊んだりしました。このプール指導は、全部で３期にわたり実施予定です。

今後９月中旬まで、連日ボランティアを受入れ、子どもの遊び場や学習支援、ワーク、プール指導などを予定しています。東京ＹＭＣＡリーダー、ジュニアリーダー（高校生）、山手学舎生、専門学校生の他、全国の都市ＹＭＣＡ・学生ＹＭＣＡからも派遣が予定されています。

先日、市内の仮設住宅を訪問する機会がありました。仮設住宅の間取りはどこもほぼ同じで、入ってすぐに狭いキッチンがあり、脇にトイレとお風呂、奥に四畳半の部屋が２つあります。親子二世代で住む家庭にとっては狭く、子どもの学習机や本棚を置くスペースはほとんどありません。

市内の教育関係者にリスニングを行うと、必ず出てくる項目が２つあります。１つは落ち着きがなくなった子どもが増えたということ。もう１つは成績の低下が心配であるということです。失業などにより経済的な不安をかかえているご家庭が少なくないことや、仮設住宅での暮らしなど、震災によって子どもたちの生活環境が大きく変化したことを考えれば、落ち着いて勉強できないことも想像に難くありません。

短い期間であっても、一生懸命子どもと向かい合うボランティアの存在は、子どもたちなりにも感じるものがあり、震災の悲惨な体験を乗り越えていく力になるとの期待があります。ＹＭＣＡの支援活動・交わりを経験した子どもの中から、将来この地で復興のリーダーシップを担う者が出てくれれば、これ以上の喜びはありません。

→学習支援プログラム

→社会体育・保育専門学校学生によるプール指導

→グループホーム「あゆかわの郷」で開催した歌の広場

東陽町ＹＭＣＡ保育園

１０周年記念講演

「生きる力をつける」ために

新澤 誠治 氏

江東区子ども家庭支援センター「みずべの会」所長。神愛保育園園長を40年つとめ、東京家政大学でも教鞭をとる。東京ＹＭＣＡではアドバイザーとしてかかわっていただいている。著書に『私の園は子育てセンター』『子育て支援はじめの一歩』（小学館）他多数

12年ほど前、ＹＭＣＡの堀口廣司主事から、「理想的な認証保育所をつくりたい」と相談を受けました。そこで私は、「遊びと生活が豊かにできる環境をつくりましょう」と、提案をさせてもらいました。乳児にはぬくもりのある木の床がいいこと、家具も木製が良く、調理室は広い方がいいなど、ほかにもいくつか、予算も考えない理想を話しました。すると堀口さんは、そのとおりの保育所を作ってくれたのです。こうしてこの、江東区を代表する立派な認証保育所ができました。区も非常に高く評価していますし、私も、都内でも誇れるいい施設だと思います。

愛情を差し出すということ

また、私は当初から、保育者のための学習会もさせてもらい、保育で大切にしてほしいことを話しています。それは、保護者にとっても大切なことですから、今日はそのことをお話したいと思います。

私が一環して伝え続けているのは、「子どもたちにやさしい愛情を差し出してください」ということです。具体的には３つありまして、１つは「やさしい眼差しをおくること」です。子どもは誰でも神様から与えられた賜物をもっています。大人は子どもの欠点ばかりを見がちですが、冷ややかな目で悪い所を見ないで、肯定的な眼差しで見守り、笑顔をおくり、いい所を伸ばしていきましょう。

２番目は、「やさしい手を差し出すこと」です。乳児はできるだけ抱きとめて具体的に愛情を示す、スキンシップが必要です。３番目は「やさしい言葉を投げかけましょう」ということです。いつも「あなたは大切な子だ」「好きだよ」と言い続けてください。

この３つを私は長年ずっと考えてきました。これが保育（子育て）の基盤にあると思うのです。

祝福のシャワーをおくって

それから私がもう一つ、強調してきたことは、「保育園や子育て広場は、〝祝福のシャワー〟をおくる所です」ということです。

私は、生まれたとき未熟児でした。当時は未熟児が育つ確率は低く、大変なことでしたから、近所の人たちが心配して集まってきて、「かわいいね」「いい子だね」「きっと賢くなるよ」などと口々に言ったといいます。その後も「大きくなったね」などと言って見守ってくれました。こういうのが〝祝福のシャワー〟です。中学生の頃、私は今でいう不登校の状態になったことがありましたが、乳母はそのとき、この生まれたときの話をしました。こういうことを言われて大きくなると、自分が愛されたと実感し、命の大切さを思う。これが自分の生涯で大きな力になったと思っています。

人間の基盤を作る乳児期

エリクソンという有名な学者がいます。彼は「人間が人間らしく育つためには、乳児期、幼児期、学童期、思春期などその時々に大切な体験をしていくことが大事だ」といっています。特に乳児期は、基本的な人間の信頼を築き、人間の基盤を作る大切な時期だと言っています。親を信頼する、社会を信頼する、人を好きになる、自分を信頼する、それがエネルギーになり、幼児期への自立の力になっていくというのです。自分では何もできない乳児の欲求に一つ一つ応えてやる、満たしていく、その中で信頼が生まれていきます。とはいえお母さんたちは忙しいですから、母親にすべて任せるのではなく、保育者と分かち合って一緒に「祝福のシャワーをおくる」必要があります。

「精神のバネ」を育てる

ＹＭＣＡの赤三角マークは、「精神」「知性」「身体」の３つの柱を表しています。私はこの中で特に「精神」が大切だと思っています。精神の力は、愛されているという実感が基盤になって育まれますが、「神様に愛されている」と、口で言うだけでは伝わりません。愛されていると実感をもてるように「祝福のシャワーをおくる」必要があります。そこから〝精神のバネ〟がつくられてくる。それは、いざとなった時に、自分に誇りをもって頑張れる力です。自分をダメだ、みじめだと思うのではなく、なにくそと思って跳ね返す〝精神のバネ〟が必要です。

大津市でいじめによる自殺が起きました。ちょうど私の孫が中学生なので、親や周囲ができることは何だろうかと考えてみました。識者は「いじめは親にはなかなか言えない」と言っています。しかし、それでも、幼いときから話しやすい関係を築いておくことは大事だと思います。嬉しかったこと、楽しかったことなど、思いを吐露できる関係を日常の中で築き、喜怒哀楽を表現する力をつけていく。そうやって、心が閉ざされないようにしていくことは、いじめに限らず、思春期の問題を乗り越えるために大事なのではないでしょうか。もう一つは、「私はいつもお前の見方だよ」「何かあったら守る、助けるからね」という姿勢を伝えることではないかと思います。

生きる力をつけるということ

保育の目的は、「生きる力をつけること」だと思います。それは、人を負かし、競争社会を勝ち抜く、勝ち組になることではなく、人と協力しながら何かを成し遂げていく力です。自分の命を大切にし、自分を誇りに思える子、自分らしさを発揮できる子、同時に他の人も大切にできる子です。

「迷惑をかけない人になる」ということもよく言われますが、人は迷惑をかけずに生きていくことはできません。私の人生なんて、人に迷惑をかけながらやっと生きてきたようなものです。園長を長くしていましたが、保護者や職員に支えられて、一緒に考えて、喜びあって、信頼して、連携していく、それが大事だったと思っています。

子どももこれから大きくなっていけば、さまざまなことに出逢っていきます。それを乗り越えて行ける、本当の意味で力をもった人になってほしいと思っています。（まとめ　広報室）